

【報告】 第 22 回太平洋史学会研究大会に参加して

飯高伸五（高知県立大学）

筆者は、2016年5月19日から21日までグアムで開催された第22回太平洋史学会研究大会（22nd Pacific History Association Biennial Conference 2016）に参加した。太平洋史学会（Pacific History Association 以下、PHA）は1980年に設立され、歴史学者のほか人類学者も多く参加している。研究大会は当初は毎年、後には隔年で、太平洋地域を中心に開催されてきた。これまでオーストラリアでの開催が最も多く、その他にもニュージーランド、フィジー、パプアニューギニア、サモア、キリバスなどで開催されたこともあった。前回2014年の第21回大会は初めて台湾の台北と台東で開催された。そして、今回グアムで開催されたのは1990年以来のことで、グアム大学のアン・ハットリ（Anne Hattori）博士とジェームズ・ビエルネス（James Viernes）博士が実行委員長を務めた。太平洋史学会、グアム大学の他、グアム保全トラスト（Guam Preservation Trust）がスポンサーに名を連ねた。

日本から近い地域で開催されたこともあって、日本オセアニア学会会員をはじめ、日本をベースに活躍するオセアニア研究者の参加も目立ち、4つの基調講演のうちひとつは、一橋大学のグレッグ・ドボルザーク博士が“Invading the Future in Kwajalein Atoll”の演題で行った。また、研究大会に続く2016年5月22日から6月4日までの間、第12回太平洋芸術祭がグアムで開催されることになっていたため、双方に日程をあわせてやって来たオセアニア研究者も少なくなかった。筆者は、芸術祭が始まってから程なくして帰国しなければならなかったが、22日は研究大会後のエクスカッションに参加しながら、その合間に芸術祭会場に足を運び、開会を告げるカヌーの到着式やダンスパフォーマンスなどを一部見ることができた。

研究大会の大半は、タモン（Tumon）地区のハイアット・リジェンシー・グアムのボールルームおよび会議室で実施されたが、開会式とそれに続く最初の基調講演はグアム大学で実施された。大会参加者は朝7時過ぎ、タモン地区からマンガラオ（Mangilao）地区にある同大学のキャンパスにバスで移動し、そこで地元の果物やパンなどの軽食を提供された。そして、グアムの高校生や大学生の選抜者が参加している Inetnon Gef Págo¹によるダンスパフォーマンスや、大会長および学会長の挨拶が行われ（写真1）、ロバート・アンダーウッド（Robert A. Underwood）博士の基調講演“Chamorro History: Is the Forward the Conclusion?”が行われた。その後、再びバスでハイアット・リジェンシー・グアムの会場に戻り、午後から研究発表が始まった。

¹ パフォーマンスを通じてチャモロの意識や自尊心を高めることを目的とする文化芸術プログラム。ここ15年ほどの間にグアム内外で公演を行っており、数々の受賞歴がある。
<http://www.inetnongefpago.com/about-us/mission-and-accomplishments> 参照（2017年3月5日最終閲覧）。



写真1 グアム大学での開会式（筆者撮影）

今大会では、4つの基調講演のほか、186の研究発表が事前登録され、多数のパネル発表が行われた。既述の基調講演の他には、オーストラリア国立大学のカタリナ・テイワ (Katerina Teaiwa) 博士の講演“Transdisciplinary Approaches to Pacific Pasts [Presents and Futures]”およびハワイ大学のデビッド・ハンロン (David Hanlon) 博士の講演“Losing Oceania for the Pacific and the World”が行われた。太平洋史を名に関する学会であるが、研究発表のパネルには、“Oceanic Masculinities in Island/er Pasts and Presents” (James Viernes), “Music and Dance of Oceania Symposium: International Council for Traditional Music” (Michael Clement and Brian Dietrich), “Pacific Presences: Oceanic Art and European Museums” (Julie Adams and Nicholas Thomas) など (括弧内は代表者、以下同様) 人類学的なものも多く、歴史研究と現代社会の研究が緊密なオセアニア研究のありようをよく示していた。

歴史や歴史教育を対象としたものとしては、“Micronesia during Spanish Colonial Times: New Readings of Old Sources” (Carlos Madrid), “Continuing Legacies of the Pacific War: New Perspectives on History (Andrew Connelly, Ryota Nishino and Matthew Kelly), “Trans-pacific Movements in Mission and Church: Making Religious Identities” (Helen Gardner and Jane Samson), “Teaching Pacific History – Or, How to Absorb New Themes and Paradigms” (Max Quanchi)などがあつた。筆者は“Continuing Legacies of the Pacific War”に参加し、パラオの戦争遺跡と観光活用に関する研究発表を行った。全体のディスカッションでは、マリアナ諸島やパプアニューギニアなど他地域の事例と比較検討を行った。

その他にも、ナショナリズムを対象とした“Reflections on Nationalism(s) in Oceania: Global Influences and Indigenous Perspectives” (David Chappell), 図書館や文書館の役割を検討した“Revitalizing Pacific Library and Archive Collections” (Kylie Moloney and Eleanor Kleiber), オセアニアにおける中国や台湾の進出を検討した“Histories that Matter: The Past, Present, and

Future of China in the Pacific” (Terence Wesley-Smith)など、現代オセアニアの情勢に呼応したテーマも多岐にわたって設定されていた²。

グアムでの開催ということもあり “The Guam History Day Program: A Shift in Student Learning”, “Chant in Guåhan” (Ojeya Cruz Banks and Dâkot-ta Alcantara-Camacho), “Unearthing Chamorro History” (Luke Davis), “Militarization in the Marianas” (Vicente M. Diaz) など、マリアナ諸島を対象としたパネルも多数あり、特に現代におけるチャモロ文化活性化の取り組みや、軍事化のなかのチャモロ文化の動態に関する報告などが目立った。また、前回大会が実施された台湾からの参加者も目立ち、“Indigenous Knowledge and Contemporary Development: Experience from Taiwan” (Daya Kuan), “Multiculturalism and Indigeneity in Taiwan” (Chuan Fu Chen)など、台湾原住民に関するパネルもあった。台湾からは多くの研究者や大学院生が国費で参加しており、オーストロネシア研究やオセアニア研究が組織的に推進されている様子が見てとれた³。

研究大会の締めくくりは、ハンロン博士の基調講演であったが、会場には同博士のもとで学んだ研究者が多く集い、旧知を温める様子も見られた。講演に先立ち、スペイン時代からの伝統があるグアムの弦楽器ビリンバオトゥーザン (belembaotuyan) の演奏が地元の演奏団によって披露される一幕もあった。閉会式では、次回大会がケンブリッジ大学考古学人類学博物館のニコラス・トーマス (Nicholas Thomas) 博士を大会長に実施されることのアナウンスされ、同博士から挨拶があった。

大会終了後は、バスでタロフォフォ (Talofofo) 地区まで移動し、観光客にもよく知られているレストラン、ジェフズ・パイレーツ・コーブ (Jeff's Pirates Cove) でバンケットが行われた。同地区内には、残留日本兵として発見された故・横井庄一が住んでいた洞窟がある。レストランのオーナーは、グアムを再訪した生前の横井氏と親しく、同氏の写真パネルを多数展示した私設の資料館がレストランに隣接してつくられている。ホテルが建ち並ぶタモン地区の喧噪から離れて、参加者はここで交流や情報交換を行った。バンドの演奏とともに参加者が踊り出す盛り上がりのなか、最後のバスは予定より大幅に遅れてタモンに帰着したという。

5月22日にはエクスカージョンが企画され、第二次世界大戦時の米軍の上陸地点アサン (Asan) を見下ろすアサン展望台、チャモロ人の遺跡があったセッティ (Cetti) 湾を望むセッティ湾展望台、そしてマゼランの上陸地点として知られているウマタック (Umatac) 村落を半日かけてまわった (写真2)。アサン展望台では、グアム大学のビエルネス博士が、日本軍のグアム侵攻と米軍による「解放」のなかで命を落としたグアムの人々、および日

² 事前登録されたすべての発表タイトルと発表要旨は、グアム大学の以下のサイトから閲覧できる <http://www.uog.edu/phaconference> (2017年3月5日最終閲覧)。

³ 研究大会に続いて実施された太平洋芸術祭でも台湾原住民は存在感があり、ダンスの上演時間なども長かった。筆者が、2004年にパラオ共和国で開催された第9回太平洋芸術祭を見た当時は、台湾はゲストとしての参加に留まっていた。ちょうどこの頃から、台湾原住民がオーストロネシア語族であることを根拠として、台湾ではオセアニア研究やオセアニアとの文化交流が推進されていった。

本軍による占領期間中に収監や強制労働に処されたグアムの人々の名前が刻印されている記念碑を案内した。そして、刻印された自身の祖先の名前を指さしつつ、グアムの人々に直接言及した唯一の記念碑であることを説明する一幕もあった。

ウマタック村落では、地元学生のご案内で、マゼラン上陸記念碑をはじめ、スペイン時代の教会跡や城塞跡などを見学するとともに、簡単なハイキングをしながらスペイン時代以前の神話・伝承の残る遺物の説明を受けた。そして、タロイモのほか、アチョーテで色つけしたレッドライス、レモンや唐辛子をあえたスパイシーチキン、バナナのココナッツミルク煮など、地元料理を盛り込んだ昼食を頂いた後に、バスでタモンに戻った。研究大会参加者のなかには、引き続き、この日の夕刻からハガツニャ (Hagåtña) で実施された太平洋芸術祭の開会式に参加する者もいた。

筆者にとって、3 日間にわたる研究大会と半日余りのエクスカージョンは濃密で、緊張感もあったが非常に充実した時間であった。発表者および参加者が多く、多岐にわたるテーマでパネルが実施されているということだけではなく、オセアニアの人々が発表者にも聴衆にも多くいる状況のなかで研究発表を行うことの意義など、改めて考えさせられる点が多くあった。筆者は、前回の台北・台東での大会に続いて今回参加したが、今後も積極的に参加を検討していきたい。



写真2 ウマタックに到着し、村民から歓迎を受ける（筆者撮影）